光に呑まれて闇に墜ちた

ＲＳ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光に呑まれて闇に墜ちた

【Ｎコード】
Ｎ６９１７Ｊ

【作者名】
ＲＳ

【あらすじ】
僕は死んだ。そして痛みと共に生き返った。力と一緒に。
初公開作品。異世界ものの予定。行き当たりばったりでいつまで続くか未定。更新日も未定。どんな冒険ものか討伐ものかも未定。と未定三兄弟見事に揃った作品。って呼べればいいなぁ。

念の為残酷設定。流血ざたは……あんまりしないと思うよ？
最新投稿話、改めて読み直すと酷すぎる……と言うわけで、書き直します。本筋は変わりませんが、文章はかなり変わると思います。

迷惑をおかけします。

空翔ける天馬太って落ちた（前書き）

プロローグ。達人盗人。

１０／２／４　一部訂正と追加。本編に影響はありません。

空翔ける天馬太って落ちた

僕は天国へ登っている。
ぼうっとした意識が雲のようにたゆたい、お母さんに抱かれながら眠るように、或いは春の日差しが暖かく包み込んでくれるかのように。
ふわり、ふわり。
重い何かを脱ぎ捨てて、同時に大切にしてた悲しいことも投げ捨てて、僕は宙を舞う。
元僕の塊から遠く。空から差し込む光の道に導かれて。
早く進みたくて、サラサラとした何かを徐々に落として、少しの喪失感と、暖かな充足感。痛い棘を抜いて、暖かな水で満たして。
そんな感じ。

ふわり、ふわふわ。
わからない。なにか、おっきなものから、ぬけて。
きっと、おんなじものがあふれる、あったかいところ。
ふわり、ふわふわ。
あたたかなうみにはいって、ぼくがぼくのせんをけして。
だんだんと、ほかのあたたかなものといっしょになっていく。
ふわり、ふわふわ。

あたたかなうみにまじって、ぼくからとけだすぼく。
うみのはしから、さらさらとしたなにかが、だんだんきて、ぼくたちを呑み込んで、

いたいいたいいたいいたいイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！

走る激痛、衝撃。熱した針で毛穴を余す事なく刺される、だなんて表現が甘くなるほどの痛み！　苦しみ！
殺されて、また生き返って、そして殺される。切り刻まれて切り刻まれて切り刻まれて、そして切り刻まれる。

裂けて切られて叩かれて刺されて折られて抉られて削られて引き摺られて割られて砕かれて燃やされて。
突かれて殴られて潰されて破裂されて撃たれて掴まれて破られて剥されて埋め込まれて引っこ抜かれて噛まれて千切られて捻られて掻き回されて引っ掛かれて溶かされて縫い付けられてすり下ろされて挿れられて――――――！！

気がついたら、真っ暗な闇の中にいた。

葉っぱ一枚あれば幸せ。女の子は三枚（前書き）

２／４　一部訂正と追加。一応本編に関わる部分もあるけど大きな影響はありません。

葉っぱ一枚あれば幸せ。女の子は三枚

真っ暗だった。光がなくて、いやきっとあるけどここまで射さなくて、つまりは黒しかない。
澱んだ空気は泥臭くて、息を吸ったらむせた。

「ここはどこだろう」

ここはどこだろう。音が反響して、僕以外の僕が何人も喋ったみたい。
ゆっくり立ち上がって、そろりと体を確かめる。顔、胸、肩、へそ、腕、股間、太股、ふくらはぎ、足。

「細……」

やっぱり呟きは下手なコーラスの様に響き渡り、何人もがその細さに驚いたみたい。そんなに細いか、僕。
性別は男。間違いない。股間触ったし。間違いない。理由は分かるでしょ？

「それにしても、裸か」

服なんか着てなかった僕。どうしよう、猥褻物陳列罪で捕まる。それは困る。

「そもそも、人いるのかな？」

響く闇の中から、答えは聞こえなかった。

「取りあえず、どこか行くかな」

立って歩く。手を前に出してゾンビみたいに。調子に乗って、あ゛ーと低い声で言ってみる。反響して、凄く怖かった。

暫く歩いて、手にヒヤリとした岩肌の感触が伝わる。そのまま壁伝いに歩く。足に何か刺さったらしく、凄く痛い。

結局二分で歩けなくなった。だって足に石ころなのか何かよく分からないけど、尖ったものが刺さって凄く痛いんだよ！　分かるかいこの僕の気持ちが！

地面にへたりこんで、息を吸って、むせる。やっぱり泥臭い。

もう最悪。帰れ。むしろ帰せ。

どこに？

……。

「ねぇ僕。何があってこんな事になってるの？」

ほぼ同時に何人にも聞かれたけど、誰も答えてくれなかった。

誰も答えてくれないなら仕方ない。答えがないなら、つまりは僕がそれを見つけて、考えて、そして答えなきゃいけない。
じくじく痛む足を擦って、冷たい床のせいでお尻が冷えそうだけど、それは無視して考える。誰だっけか、記憶に引っ掛かる言葉。

『お前はもう、死んでいて』

ニアミスだよ。最後の一文字で名言が迷言だよ。いやこれはどうでもいい。つーか誰だよこれ言ったの。

『死ねっ！　いっぱい死ねっ！』

むしろお前が死ねっ！

なぜだろう、まともな記憶がないのは。というか、もしかして記憶喪失？
僕の名前は……名前は……いやいや、そんなはずない。ここは誰、私はどこ的な事なんて起こり得る筈がない。よく考えろ。考えるんだ。ほら、アリスさんとテレスさんも言ってたじゃないか、人は考える足だと。いやいや、歩くなよ僕。生えてろよ僕。葦だよ葦。イネ科の多年草、葦。テストに出されて漢字書けずに減点された、葦。

よし、考えるんだ。考えることこそが僕が葦になる唯一の方法だ。
よし、まずは深呼吸。吸って、はいて、ヒッヒッフー。

……うん、落ち着いた。葦じゃなくて人間になろう。
取りあえずここドコ？　わたしダレ？

しかし、寒いなぁ。さっきからわざわざ声出して響くかどうか確かめたら響くしさ。多分響くって事は岩蔵なんだろうな。冷たいし。そんでもって、もしかしたら出口は遠いのかもしれない。
……別に寂しくて声出したんじゃないよ？　本当だよ？

仕方ない。寒いし、このままじゃ凍死しちゃうかもしれないから。仕方ない。
世界のバランス崩れちゃうけどやるか。

さっきから僕を痛め付けやがった石ころを拾う。そして食べる。いや、食べるってのはおかしいか。でも適当な表現が思い付かないから食べるでいいや。
石ころ一つ。本当に小さな石ころ一つ。多分１０ｇもない。親指の爪ほどの大きさの小さな石ころ。
でも、これで十分暖かくなる。
そもそも物は、存在するだけでエネルギーの塊なんだもん。ふふ

ん。

石ころ一つを食べて、その馬鹿みたいに沢山あるエネルギーを、床の熱エネルギーに変える。ちゃんと調節して、火傷しないように。お尻が赤いのは猿だけで十分だ。

……あ。

光エネルギーに変えれば、暗い岩蔵でも平気じゃん。うわ、僕バカだ。馬に乗られた鹿さんだ。

パッと、光エネルギーの塊を前方に出す。目が眩む。ミスった。

今度は僕の後ろから照らすようにする。見えづらいけど見えなくはない。

岩蔵だと思ってた思惑は違えてて、そこは地下室みたいだ。

冷たい壁は適当に石を泥で固めて焼いただけで、耐震強度とかそういうのはまったく考えられてないらしい。震度三で崩れ落ちそうだ。

場所はすっごく広くて、体育館くらいの広さはある。何に使うか分からない、ただ広い空間。声も響くわけだ。ぼくのへたり込んでる場所の対角に階段がある。それはしっかりと作られてて、う～ん、ここは何に使うんだろう。

よくわからないのは仕方ない。僕は僕さえ分からないんだから他の事が分かるわけがない。

ちゃんと階段があるって事は、知的人的存在がいるって証拠だろう。

歩く度にユラユラうごめく影が、何かを誘うように揺れて、揺れて、僕は歩いた。

階段の上は岩だった。岩盤かもしれない。両手で押す。動かない。両手で引く。そもそも掴めない。

叩く。コツコツと硬質な音が響く。殴る。手がいたい。

残りのエネルギーの一部を運動エネルギーに変えて押してみてもいいけど、それでこの部屋崩れたらやだなぁ。かと言って、こんな岩盤食べたらエネルギー過多で暴発が怖くて放出出来なくなる。それは困る。すごーく困る。

どうしようか悩んでたら、岩盤が引きずる音を立てて開き出した。叩いたのが外に聞こえたのかな？

完全に開いた時に目の前は森の木々を背景に目を見開いて驚いてる男の人がいた。眼が飛び出そうなくらい開いてた。

「あー、えっと、ここどこですか？」

僕が話しかけると、汚れた胸当てをした人は真っ青な顔して逃げ

出した。え、何かした僕？
まぁいいや。とにかく、ここから出なきゃ。僕は後ろの光を消して地下室から外に這い出た。

新鮮な森の空気が気持ちいね！
さっきまで真っ暗な地下室にいたせいで、凄く解放感溢れる。そこそこ鬱蒼とした森で、地面は草が脛くらいまで伸びている。地下室の階段は岩の板で隠していたらしい。ヒューって吹く風が僕を祝福するかのように僕をブラブラと揺らす！

……。

服欲しいな。せめて下着。

解放感で気付かなかったが、足元に女の子が横たわってた。裸で。
やったね、裸仲間だよ！

……いや！

裸っ！？　僕も裸っ！？　君も裸っ！？
待て僕。待つんだ、ここはクールになる場面だ。
彼女と喧嘩して思わず別れてやるっていった後に後悔して、どうやって彼女に謝って許してもらって復縁するかを考える男性並にクールになるべきだ。

「んみぅ……」

ほら、女の子も僕の考えに賛成してるかのようにんみぅと鳴いてくれてるじゃないか！　んみぅ！　んみぅんみぅ！

「みゅうみゅみぅ……」
「みぅみみぅ」
「みゅ……みぅ……」
「みぃみぅみみぅ」

っは！？　何やってるんだ僕はっ！？　まるで変態じゃないか！
第一男性が女性の気持ちが分からないように、女性も男性の気持ちは分からないんだっ！

とにかく裸はまずい。主に僕の理性面に深刻なダメージを与えるからまずい。
幸い周りに朽ち木があるから、それを食べる。そしてその馬鹿げたエネルギーが溜まる前に生成、糸に変えて、既に編んであるように吐き出すという応用技！
問題は服の知識がないから、ただのデカい布切れしか出来ない事。ないよりマシだけどね。
とにかくある程度の大きさの布を右肩から左脇下に回して体を隠す。紐も作って縛れば落ちる事もない。
女の子はさすがに恥ずかしいので布で包んだだけ。起きたら自分で着てもらおう。

さて、どこに行こうか。

いや、森の力は偉大だ。マイナスイオンが沢山放出されてるのか冷静に考えられる。

……いや、マイナスイオンは滝か。じゃあ森の香りってことにしよう。

やっぱり地下室だとこう、空気が汚れてるのか、それとも他の何かが原因なのか、落ち着かないし不安にだったんだ。真っ暗だったのも原因の一つかもしれない。怖い怖い。

そして外への出口を見つけて、早く出たいと知らず知らずに焦ってたんだ。でも押しても引いても（いや、引けなかったけどさ）開かなくって、余計焦ったんだよ。だから殴ったんだよ。右手痛い。

どうしようか困ってたら突然扉が開いて、薄汚れたオッさんと目が合って、きっと一気に気が弛んだんだ。

だからだ。

なんで僕が裸なのかとか。

なんで彼女が裸なのかとか。

なんであの薄汚れたオッさんのそばに見た目麗しき女の子がいるのかとか。

なんで僕が無機物有機物問わず食べれるのかとか。

なんでエネルギーを任意の場所に変換率百パーセントで出せたのかとか。

そういう『あり得ない』を疑問に思わなかったんだ。

とにかく、僕の勘じゃここにいちゃマズい事になる気がする。女の子も、ここに置いちゃマズいし、あのオッさんに何されるか分かったもんじゃない。

女の子を抱き上げようとして、重くて持ち上がんなくて、仕方な

く運動エネルギーを上向きに腕に与えて無理矢理な筋力アップをして女の子を運ぶ事にした。

さて、どこに行こうか。

葉っぱ一枚あれば幸せ。女の子は三枚（後書き）

念の為、ここ誰わたし何処は誤字にあらず……
訂正いっぱいあるから二月四日に直します、きっと。
受験あるからどうなるか分からないけど。投稿するなよ自分。

２／４　訂正しました。誤字や表現の違いがあれば連絡をください。
お願いします。

甘い毒りんごと苦いチョコレート

僕はあのオッさんと逆の道を行くことにした。オッさんが仲間連れて戻ってきたら僕にはどうしようもないからね。

あ、そうそう。裸足は痛いから足に布を巻いといた。草で切れたら嫌だからね。

鬱蒼と生える木々に、素人らしく方向感覚を狂わせながら、でも気持ちだけは狂わないようにひたすら歩いた。

歩くついでに色々整理しようと思う。僕もこんがらがってるから、ゆっくり思い出すのは後回しだ。

まず起きた場所。

体育館みたいに広い空間だった。壁は耐震偽装丸出しの泥壁だ。あんな広くて暗くて泥臭い場所で起きた。

石ころとかごろごろ転がってたし、多分まともな場所じゃないんだろうな。いや、文明レベル分からないから何とも言えないけど。

次。力。

これはよく分からない。

とにかく、物を食べて吐き出せる。分解して吐く事もできる。ある程度形を整えて吐き出せる。なんか汚い。

この力の理屈はウニャウニャーっと分かるんだけど、口で説明出来ない。ウニャウニャーは後で考えよう。

最後。汚れたオッさんと裸の少女。なんかやだなこの言い方。
分からない事だらけだけど、いい歳こいたオッさんが暗い地下室に裸の少女を連れ込む。なんかエロスの匂いがする。
種の繁殖とかの観点じゃ普通だが、人の倫理的道徳的良心的に正しくない。
だから、きっとあそこから連れ出したのは正しい判断だったはず。

それに、かわいいし。
……忘れて？

そしてこれからの僕の行動。
まず僕は現状を理解しなくちゃいけない。それは必要な事だ。
ここがどこで、僕は誰で、どうしてこうなったか。これが分からないとこの先どうすればいいのか分からない。
まず一番最初の『ここがどこ』は多分少女に聞けば何とかなるだろう。
だから、現状で一番情報を持ってて安全に話が出来そうな少女を庇うのは仕方ない事なんだ！　下心はちょびっとしかないんだ！！

うん、ごめん。落ち着くよブラザー。
僕は誰でどうしてこうなったか。それは僕の記憶が手っ取り早いだろうな。
しかしまぁ、どうやって記憶を取り戻すか。旅でもしてみるべきだろうか？

「んむ……ふぁあ」

あ、女の子が起きた。目が合った。

「やぁ、こんにちは」

きょとんとしてる。かわいいね。じゃなくて！

そういえば言葉はちゃんと伝わるのだろうか。もし伝わらなかったら僕と彼女の愛の語らい……げふんげふん。

僕と彼女の情報交換が出来ないじゃないか！　それはマズい！

「えっと、言葉、分かりますか？」

「あ、はい」

良かった、伝わってるらしい。

「……って、え！？　ここドコ！？　あんた誰！？　わたしも誰！？」

あれ、この子も記憶喪失？

「僕には、ここがドコで僕が誰で貴方が誰なのか分かりませんよ？」

「えっと、なんで抱き上げられてるのかな？　この布は？」

「森の中で寝てて、裸だったので取りあえず」

「叫ぶべき？」
「色々考えてた事が頭から抜けちゃいそうなんで勘弁です」
勘弁してといったにも関わらず、女の子はすぅっと息を吸って、
「キャアアアァァァァアアア！！！！！」
大音量で悲鳴を上げやがりました。

耳痛いし、驚いて女の子落としちゃった。女の子は痛っで小さく悲鳴をあげてから、バッと僕から離れようとして布に引っ掛かって転んだ。
かわいい。じゃなくて。
「えっと、僕は怪しいオッさんじゃなくて、あ、これ紐。布ずれ落ちないようにこれで縛って下さい。肩見えててセクシーですよ」
「ギャー、後ろ向け後ろぉ！」
僕から紐をひったくると、思いっきり僕を殴った。素晴らしい右ストレートだった。パーフェクト、ワンダフォー、ビューティフル。
ぐらつく視界をなんとか落ち着かせながら後ろを向く。グワングワンと揺れる世界にグランングランと揺れる理性。

だって、ねぇ？　布が擦れる音がして、周りにはかわいい女の子しかいなくて、僕は立派な男で、ねぇ？

「……いいわよ」

しばらくがさごそやって、振り向きたい衝動をどうにかこらえてると許しが出たんで振り向く。どうやったのか首から下は綺麗に、無慈悲に布で覆われてた。腕すら出てない。

「で、なんでこんな事になってんのか説明してくれるんでしょうね。出なきゃガード呼ぶわよ」

ガードって警察だろうか？　それは困る。

「ええっと、まず自己紹介からしませんか？」

「名乗るならまず自分からしたら？」

「いやぁ、その、僕記憶喪失でして。名前も何してたかも分からないんですよ」

「ふーん」

うわ、この目信じてないよ。そりゃそうだよな、僕も立場逆なら信じれないよ。

「君の名前は？」

「……リーシャ」

「本名は？」

「あんたやっぱりあたし狙いの誘拐犯？」

うん、偽名でしたか。やっぱりね。

「誘拐犯って？」
「いや、脅迫状送ってきたのあんたでしょ？」
「だから僕記憶喪失」
「ちっ」
「舌打ちしないで。さっきのウス汚ない胸当てした人かな？」
「……」
「……」
「……リクシエル」
「え？」
「あたしの名前！　リクシエル＝ファラード！　誘拐したのあんたじゃないって分かったから教えてあげるの！」

目が泳いでます。絶対今の今まで犯人の顔忘れてましたよこの子。

「まぁいいや。脅迫状って？」
「赤文字で紙いっぱいに細かい字で『好き』って」
「……そりゃ怖い」
「あたしも怖かった」

うん、あれは怖いよ。一回やってみるといい。怨念がこもってるみたいで怖いから。

「ところでここドコなの？」
「僕には分からないなぁ。目茶苦茶広い地下室っぽい場所で誘拐犯（仮）さんに会って、誘拐犯（暫定）さんが逃げ出した方向と反対方向に進んだから」
「なんで誘拐犯（確定）は逃げたの？」
「さぁ？　誰かに会うと思わなかったんじゃない？　ところで地下室っぽいところがある森ってしってる？」
「んー……あたしは知らないけど」

「そっかぁ……」

う〜ん、スタートからさいころ振ったら振り出しに戻った気分。

「ところでさ。文化について教えて欲しいんだ」

「文化？　なんでまた」

「いや、記憶喪失って言ったでしょ？　記憶があるのは出入り口塞がれて真っ暗な地下室の中からだけなんだよ」

「あ、そうなの。でも文化って言われても」

「明かりはある？」

「ガス灯の事？　あるわよ」

「車は？」

「車？　馬車の事？」

「電気」

「偏屈者の無駄な研究ね」

「トイレ」

「変態」

「道」

「道って何よ」

「舗装されてる？」

「都心部はね」

「戦争は？」

「真っ最中ね。ルーゼンブルグ連合軍とアルゼニア同盟軍でね。南北戦争なんて言われてるわ」

「んー……武器で一番最近出たのは？」

「機関銃って言うの？　ババババって凄い騒音で人をたくさん撃ち殺したって新聞に書いてあったわ」

「あー、うん。ありがとう」

結論。近世前半辺りの文明レベルみたいです。でも車や電気がな

い辺り少しレベルは低いかもしれない。
異世界ものなら普通は中世じゃないのかなぁ？

「で、あたしからも聞かせてもらうけど」
「なに？　答えられる範囲なら答えるよ」
「これからどこ行くの？」
「……」
「……」
「考えてなかった」
「馬鹿じゃないのっ！」

どーしよー。誘拐犯（仮定）さんから逃げる事しか考えてなくて、今夜のことまったく考えてなかった。

「あわわわわ」
「落ち着けバカっ！　えっとまずは何だろ、必要なもの、生活の基本はえっと、そう、衣食住！　衣食住よ！」
「衣食住！」
「衣は雑だけどあるわね、食は……」
「ないです」
「ええい、サバイバル経験は？」
「ないです」
「食べれるものと食べれないものの見分け方は？」
「わからないで……あ、あの木の実は食べれて、あの山菜はアクが強くて苦いけど食べることはできますよ」
「よし、食料調達を命じる」
「住は？」
「……役割分担だから仕方ないわね、あたしが何とかするわ」

出来るのかな？

「雨風をしのげればいいのよ。ほら、ここでいいわ。お互いの位置が分かる場所で作業すること」
「はーい」

そして僕らは離れた。地面に生えた山菜を何個か引っこ抜き、手にもてるだけ持って集める。
途中で手が切れたりして痛いけど、リクシエル……シエルでいいか。シエルは親指ほどの太さの蔦相手に石を振り下ろしてる。向こうのほうが大変そうだから、僕が弱音はくわけにはいかないよなぁ。
そうやって日が沈みかけて辺りが暗くなることには僕は山のような山菜に木の実、キノコまで集めることに成功した。

「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ……蔦、切るの……大変、なのね」

息も絶え絶えにシエルが言う。さすがに心配だ。女の子だし。

「後は僕がやろうか？」
「いい。私だけ何もしないわけにはいかない」

ちらりと僕が集めた食料の山に視線が行った。うーん、良かれと思ってやったのが返って負担になったのか。

「じゃあ手伝うよ。僕も何もしないわけにはいかないから」
「そう……じゃあ蔦を木に結んで、洗濯紐みたいにして。私は上に乗せるもの、集めてくるから」
「いや、それは僕がやるよ。シエルが蔦を結んでて」
「シエル？」
「リクシエルだからシエル。駄目だった？」
「……まぁいいわ。じゃあお願いね」

「うん」

シエルが切り落とした蔦を木の幹と枝の付け根の辺りでしっかりと結んだ。なるほど、それならそんなに重くない限り落ちないだろう。

さて、僕だ。上に乗せるもの。で、雨風をしのげるもの。
布。雨漏りが悲惨すぎる。
葉。相当大きくないとかけれない。
石の板。蔦が重さに耐えれない。
むむむ、相当難しくないか？

そうこう考えてるうちにシエルは結び終わったらしく、僕に近づいてくる。

「そっちはどう？　集まった？」
「いや、何を集めればいいやら」
「……ごめん、言ってなかったね」
「なに集めるつもりだったの？」
「まず木の枝。これを蔦と蔦の間にかける。次に葉っぱをその上に乗せて、最後に、その……」
「……？」
「ええっと、うーん……その、ね？」
「何？」
「服を、使って風除けにするの」
「ふーん」
「ふ、ふーんって何よ！　あたしのもだし、あんたのも脱ぐのよ！　それで一緒に寝るのよ！　裸で！」
「へぇー……え？」
「勘違いしないでよ、仕方なくだからね、風除けが他にないから仕

方なくよ！」
「え……あ、うん……」
「あーもう！　木の枝集めるわよ！　早くっ！」
「あ、はい」

多分、僕もシエルも顔真っ赤だろうなぁ、うん。暗くてよかった。
しかしどうしよう。このタイミングで実は木があればすぐに布なんて作れますなんて言えない。
というより、蔦なんかなくても木があれば紐も作れるなんて言ったらシエルの怒りが爆発してしまう。それは嫌だ。
かといって、裸で一緒に寝るのは……魅力的だけど精神衛生面でよろしくない。
うー、どうしようか。

塩が欲しい。塩（前書き）

ＰＶ１０００いってました。驚きです。
今回の話でとりあえず更新はお休みです。受験勉強しなきゃ……
次回更新は１１日以降もしくは２６日以降です。

塩が欲しい。塩

当然と言っちゃ当然だけど、木があれば簡単に布が作れる事を言ってみた。

「ふ……」

「ふ？」

「ふざけんなー！　あたしの葛藤返せ！　一応恩人だから一緒に寝るくらいなら許してやろうとか考えてたあたしの気持ちを返せ！」

結果は怒鳴れ殴られで散々でした。

「とにかく、木がありゃ簡単に布作れんのね？」

「かほがひたひ」

「何言ってんのか分かんないわよ」

「ひへるのへひひゃ」

「あたしのせいにするんだー？　へぇーほぉー？」

「ひゃんひゃよ」

「分からないならいいわよ？　乙女の心を踏みにじった罰が足りないみたいだし、もっと体に分からせなきゃ……ね？」

「ほ、ほへんひゃひゃひ」

「分かればよろしい」

顔が腫れ上がって上手く喋れない。いや、本当にひどいんだって。顔が。

「じゃああの木でいいからさっさと布作れ変態」

「ひゃひ」

シエルが指した木を食べる。食べ……あれ、食べれない。マズい、なんで食べれないの！？　さっきの朽ち木は簡単に食べれたのに！

……今さら食べれませんなんて言ったら、今度こそ殺られる。

「どうしたの、さっさとしなさいよ」

怪訝な顔で覗き込むシエル。ヤバいヤバい、なんで食べれない。さっきと今回の違いを考えるんだ。僕なら出来る……！！

……あ。

「ひへるひゃん」

「何よ、いきなりさん付けで」

「しんへなひとひゃべれまへぇん」

「死んでないと……何？」

「たべれまひぇん」

あ、少し喋りやすくなった。

「……嘘じゃないでしょうね」

「まだひにたくないへす」

「……死んだ木なら平気なの？」
「はひ」
「……まぁいいわ。探しましょうか、死んだ木」
ものすごく怖い顔でズンズン歩くシエル。
……初日で命の危機ってなに。

黙々と歩いて木の枝を拾う。そうしていると、シエルが川を見つけて、そういえば飲み水を確保してない事に二人して気付いた。
「危うく干からびるところだったわね……ほら、あんたも顔洗えば？　酷いよ」
やったのはシエルでしょ。だなんて言えるわけもなく、僕は水をすくって顔を洗ってみる。
触れると痛いけど、別に染みないところから切り傷はないようだ。口の中も切れなかったし。
僕は川に顔ごといれてみる。顔の熱がグングン抜けていって気持ちいい。
「ちょっとあんた、顔ごとは止めなさい」
「うー……だって気持ちいいんだもん」
「……ほら、この木の枝使って布作りなさい。それで冷やせばいいでしょ」
「はーい」

シエルから渡された木の枝を食べる。今回は食べれたのでそれを布に変えてしまう。

「本当に、出来たんだ」

シエルが驚きの目で見てくる。

「まぁね」

「記憶喪失って本当？」

「うん、僕が誰かも、何してたのかも分からないよ。でもこれは出来るんだよね。理屈も一応ウニャウニャーと分かるんだけど、よくわかんない」

「変なの」

「僕も分からないよ」

僕にとっては、歩く事と同じように物を食べる事が出来るんだから。

「まぁいいわ。貸して」

「へ？」

「屁じゃなくて。ほら、ここに頭乗っけていいから横になりなさい」

「はい？」

問答無用で僕の頭はシエルの膝へ。濡らした布でシエルは僕の顔を拭いてくれる。

「痛っ」

「あ、ごめん。力強かった？」

「うん、ちょっと」

「このぐらい？」

「ん……気持ちいい」
「そう」
ところでシエルはなぜいきなり膝枕なんてしてくれるのだろう。
「……やり過ぎた。ごめんね」
あ、罪悪感あったのか。それで？
「何よその納得いってないような顔」
「そんなに顔に出てた？」
「たったそれだけでこんな事するかなぁって顔だった」
相当出てるらしい。
「ねぇ」
「ん、何？」
「川の向こう、朽ちてる木あるんだけどさ。桶とか作れる？」
「んー……多分」
「じゃあ作って」
「はいはい」
僕は立ち上がって、川の向こう側を見る。確かに朽ちてる木がある。あれなら作れるだろう。でも、
「川の向こう側にどうやって行こう？」
「水をとことん食べたら？　見た感じだけど、一度収納してから形変えて取り出すって感じな気がするから出来るでしょ？」
「出来るけど死ぬ。多分百グラム以上食べたら死ぬ」
「すくなっ！」

「一グラムでも相当な量なんだよ！」

多分全部熱エネルギーに変えて出せば、ここの地形変わるだろうなぁ。

「……小食にも程があるわね」

「……」

「ちょ、それくらいで機嫌悪くしないでよ」

「……いいよ、一グラムの威力見せてやる！」

僕は川辺の砂利を一粒手に取り、それを食べる。

馬鹿みたいなエネルギーを熱エネルギーに変えて、さらにそれに僅かな質量を持たせて、さらに分かりやすい様に光エネルギーも少量付け加える。

そうして出来た光球を水に浮かべ……あ、駄目だ。三メートルまでしか位置が操作出ない。

運動エネルギー使って指向性持たせて打ち出してもいいけど、熱エネルギーは千二百度の熱量を誇ってる。しかも調整して一グラム分のエネルギー使い切るまでずっと千二百度だ。下手したら川底に相当深い穴を開けちゃう。

あ、三メートルの範囲まで行けばいいのか。

歩いて川に近付いて、光球を川に付ける。ジュワーと凄まじい音と共にドンドン蒸発していく水。少し範囲を広げて板みたいにして、川を割ってみる。ジュワー。蒸気が怖い。

一分くらいか、相当範囲を広げてようやくエネルギーが切れた。

振り返ってシエルを見ると、口をポカンと開けていた。

¢

「シエル？」

名前のない、恩人な彼があたしを不安そうに覗き込んだ。

「あ、あ、え、何あれ？」
「一グラム以下の砂利の持ってるエネルギーを、無駄に使ってみただけ」
「無駄って、今、水がジュワーって」
「相当な熱量込めたからね」
「しかも光の壁が」
「本当は必要ないけど、その方が分かりやすいし綺麗でしょ？」
「で、でも」
「でももだってもない！　一グラムもなくたって、物にはこれだけのエネルギーがあるの！　分かった？」
「は、はい……」

ありえないよ、あれは。
木を食べて布を作った時も凄かったけど、あれは違う。こうして

見れば、あの作業がただ物を加工しただけだってよく分かった。
分解。たったそれだけで、あんなちっちゃな砂粒が、川を割った。
……怖い。

「……あ、運動エネルギー使って跳べばいいのか」

そう言って恩人であり異能の彼は、向こう岸までの七、八メートルを簡単に飛び越えた。

§

向こう岸に跳んで、朽ち木を橋に変えれば戻るのは簡単だった。
さっきの大ジャンプ、跳んだのも着地したのも目茶苦茶痛かった。もう二度とやらない。
橋を渡るとシエルがちょっと青ざめていた。どうしたんだろ？
とにかく、橋を今度は布と桶に変えて水を汲む。さっきの質量エネルギーはまた食べたから残ってるし（大ジャンプに少し使ったけど）一度沸騰させて消毒しよう。

「シエル？　桶に水汲んだし、戻ろ？」

「え、あぁ、うん」

本当にどうしたんだろう？

歩いて歩いてさっきの簡易テントの場所まで戻る。

青かったシエルも途中で落ち着いたのか、「これくらいは持ってあげる」なんて言ってさっきまで僕が持ってた布を取り上げてしまった。

簡易テントに着くとすぐさまシエルは布を蔦にかけ、その上に大きな葉っぱをどさどさ乗せた。何でもあの葉っぱは撥水性が相当高いものらしい。

「ねぇ、葉っぱを僕がつなげれば布作る必要もなかったんじゃない？」

「……早く言いなさいよ」

……んー？

「いや、僕知らなかったし」

「……それもそうね。ごめん」

……なんだろ、さっきまでのシエルなら「早く言えバカー！」くらい言って殴りかかってきそうなのに。

「それじゃ、お願い」

……調子狂うなぁ。
いつからだろう、変なシエルになったのは。
川に着くまでは普通のシエルだったよね、それから……

「ねぇ、どうしたの？」

不安そうに覗き込むシエル。小動物然としてて可愛いけど、シエルじゃないよなぁ。

「偽者？」
「誰が？」
「シエル」
「あ、あたしはあたしよ？」
「そう？　……う～ん、調子狂うなぁ」
「いいから、早く葉っぱつなげなさい」

ぽかりと優しく殴られた。
うん、変なこと考えてないでさっさとやろうか。

完成した。我らがテントが。
蔦（紐に変えようかと言ったら、シエルが泣きそうな目をしたのでそのまま）を木に縛り付けて、四角を描いて、その上に十の字状の布をかぶせ、さらにその上に撥水性の葉っぱを連ねた物を乗せたものだ。
ちなみに、葉っぱは生きてたせいで食べれなかった。仕方なく、

葉っぱの端々を裏から少量の土で固めて繋げただけだ。

う～ん……大丈夫だよね？

拾った朽ち木や木の皮を重ねて、着火に熱エネルギーを使って焚火にした。煙がモクモク出るから、木の枝や落ち葉は乾燥するまで使わない方がいいらしい。初めて知った。

桶の水を熱エネルギーを使って百度まであげて、暫く放置。殺菌はこれである程度大丈夫だろうか？

シエルが湯気をあげる水桶を少し怖がってる気がする。もしかしたらお湯にトラウマがあるのかな？　あんまり詮索しない方がいいかも。

とはいえご飯は必要な訳で。お湯が怖いのかも知れないけど、一度茹でてから冷ませば大丈夫だろう。

冷めてきた水桶の水を別の桶に移し、もう一度熱エネルギーを込めてから、引き上げ用の布を先にいれて山菜を投下。

暫くそのまま大量の山菜を茹でて、先に入れた布の端を持って引き上げる。これを何度も繰り返す。

ようやく全部の山菜を茹であげて、まだ空の桶に全部入れる。

しなっとなった山菜と固そうな木の実のサラダ。本日の夕飯。

……凄く苦くて美味しくない夕飯には、僕も、元気のないシエルも苦笑いだった。

せめて塩が欲しい。塩茹でにしたい。

夜中は結局二人で寝た。地面に敷く布を考えると作った布が足りなかったから。失敗失敗。

シリアス・シリアル

背中に小さな違和感を感じて僕は起きた。と言うより、あんまり寝れなかった。
違和感の正体はシエルで、なぜか抱き着いてきている。僕らは今、同じ布を布団代わりに寝ているので、確かにお互い密着していないと布からはみ出てしまう。
シエルのしている事は、だから理屈では筋が通っていて、でも恋人でもない二人が同衾しているのですら問題なのに、さらに抱き着くのは精神面にも良くない。

「ねぇ、起きてる？」

起きてるって言おうとして、口をその小さな手で塞がれた。

「あのね、別に聞いて欲しいんじゃなくて、これはあんたが寝てるから、ちょっと心細くなって、嫌な事を考えた女の子の、寂しくて出ちゃった、本当に些細な弱音だから、」

凄く小さな声で、途切れ途切れに呟く。

「あたしは、あんたの思うシエルはこんなやわな子じゃなくて、したたかな強い子だから、」

頑張って震える声を紡ぐ彼女に、小さくうなずく。
意図は察したのか、口に回された手を胸に添えられ、震える体を押しつけてから、独白を始めた。

¢

「あたしはね、シルビアって言う小さな田舎町に住んでたの。お母さんはね、プルムパイを作るのが凄く上手で誕生日にはよく一緒に作ったんだ。お父さんは工場で働いてて、戦争が始まる前は馬車の金具とか作ってたんだって」

「お父さんはね、一ヶ月くらい前に戦争で死んじゃったの。その半年くらい前に徴兵されたんだ。徴兵の対象が『四十歳以上の農業もしくは工業に従事してる男』で、お父さんはその対象になったんだ。」

「死ぬのはあっけなかったよ。ポストマンに貰った黒い紙切れに赤い文字でね、『ルクルド＝ファラード、ミルヘン街道にてお国に殉じる』って。たった一文しか書いてなくて。その黒い紙が、お父さんの残りだったんだよ」

「実感なんか湧かなくてね、死体も骨も残らなかったからなーんにもお父さんらしいものは帰ってこなかったの。出発前に見せてくれた帽子も、ドックタグも、二等兵のバッチも、お父さんが好きな煙草の吸い殻一つ帰ってこない。今でも悪い冗談で、国を挙げたどっきり何じゃないかって思っちゃうんだ」

「その日はね、周りの人が泣いて、でも私もお母さんも泣けなかった。ガードにね、『旦那さんはお国のために死ねたから、それは名誉なことなんだ』って言われてね。ただ周りに、ガードの言ったことを繰り返すだけだった」

「でもね、周りに挨拶して、夜部屋の布団に入ってね。ふっと、煙草の臭いがしたんだ。お父さんが吸ってる煙草。煙たいから止めてってあたしはいつも言ってた臭いがしたの。そしたらさ、なんか無性に泣きたくなって、わんわん泣いた。別にお父さんのことなんか好きじゃないし、洗濯物一緒にされると最悪って思ってたのにさ。ものすごく悲しかった」

「多分三日くらいだと思う。泣きつかれて眠って起きたらまた泣いてを繰り返してたから詳しい時間は分からないけど、多分三日くらい。急におなかが空いて食卓に行ったらプルムパイがたくさんあったの」

「お母さんがね。たくさんたくさん作ってたの。もう山のように。あたしはおなか空いてたから、遠慮なく、むしりとるように食べたんだ。でもね。甘いはずのプルムパイが、しょっぱかったの」

「お母さんの作るプルムパイは、ほっぺが落ちちゃいそうなほど甘いんだ。でも、山のようなプルムパイは全部しょっぱかったの。後で分かったんだけど、砂糖と塩を間違えてね。プルムパイが凄く塩辛いんだ」

「あたし言おうとしたんだ。『お母さん、これ凄くしょっぱいよ』って。でもお母さん、『もうすぐお父さんが帰って来るから、美味しいプルムパイ作らないと。リクもプルムパイ好きでしょ？』なんて言うから。あたし、言い出せずに美味しいよ美味しいよって、舌がヒリヒリするの我慢して食べてた」

「暫くしてね、変な人がきたの。お母さんと話して、あたしと目があったのは覚えてる。よく分かんないけど、怖かった。よくわかんないけど怖かった。あたし、関わらない方がいいのかなって思って、その人が来たら、あたしは部屋に鍵を掛けて部屋に閉じ籠ってた」

「最初は少し話して帰るだけだったんだけど。だんだん話す時間が長くなって、そのうち変な人があたしの家に泊まるようになった。

それでね、あたしももう十八だから。何があったのか、分かったの。分かっちゃったの」

「凄く気持ち悪くて吐き気がして、今すぐあたしとお母さんとお父さんの家から出てけって追い出したかった。そしてお母さんに思いっきりビンタして、いっつもされてるお説教を仕返してやるの。お母さんは泣いてごめんなさいって謝って、そしたらお父さんが帰って来て、どうしたんだ、リク、お母さんに何かしたのかって、あたしに怒るの。でも、あたしもお母さんもお父さんに泣き付いちゃって、うん、そんなことを部屋に閉じこもってずっと思ってた」

「何回か、勇気を出して言ってやろうと思ったの。でもね、塩辛いプルムパイを作るお母さんと、夜中トイレに起きたら泣きながら抱き合ってるお母さん見たら、何にも言えなかった。駄目だって、大声あげて泣き叫びたかったけど、あたしに出来なかった。それからは部屋に桶置いといて、夜中部屋から絶対出ないようにしてたんだ」

「あ、リクってあたしの事ね。リクシエルでリク。あんたみたいで単純でしょ？　……あんたはあたしのことリクって呼ばないでね」

「それから少ししてから、手紙が届いたの。ポストマンが直接手渡すものじゃない、一般の郵便物。それにね、好きですって書いてあった。『ずっと見てた』とか、『誰よりも好きだ』とか、そんな感じ」

「どこかで見たのか、変な人があたしに付き合えばって言ってきたの。でもさ、知らない人から好きだなんて言われても気持ち悪いだけなんだよね。だから、あたしは、断ったの。断っちゃったの。嫌だって、変な人に言っちゃったの」

「それから手紙はエスカレートして、今日のスカートにあってたよとか、あんな肩丸出しのワンピースは俺の前以外で着るなとか。トイレの回数が書かれた時は、本気で寒気がした」

「変な人も、あたしを邪険にし始めたの。お母さんが欲しいのであって、あたしは邪魔だったみたい。しつこくその人と付き合えだとか、色々言ってきてね。お前を養うような金はないっていうのが一番辛かった。だって、あたしをその人に押しつけようって魂胆丸見えなんだもん。どこにも居場所はないんだって。あたしは要らない子なんだって、悲しかった」

「買出しから帰ってきたら、あたし誘拐されちゃった。誘拐なのかな？　よく分かんないけど。家に帰ったら変な人とお母さんと、知らないオジさんがいたの。知らないオジさんはね、あたしを見て、『両親に許可は貰ったから、結婚しよう』って、あたしを押し倒して、無理やり、引き摺られて、あたしの部屋に、髪引っ張られて、……ごめん、思い出したくない。言えるのはね、凄く痛くて泣きたくて、好きな人にあげたかったもの全部取られちゃったの」

「気を失う前にね。お母さんの顔が見えたんだ。もしかしたら気のせいかもしれないし、あたしの思い違いかもしれないけど、お母さん泣いてた。目を真っ赤にして、泣いてた。でもね、あたしの心がささくれ立ってるからかもしれないけど、ほっとしてるようにも見えた。お母さんも、あたしを疎ましく思ってたのかもしれない。もしかしたら、あたしにお父さんの面影が残ってて、あたしを見る度に罪悪感を感じてたのかもしれない」

「そうそう、誘拐犯だけどね、汚ないオジさんなの。薄汚れた胸当てをした、四十後半五十前半くらいの、お父さんくらいの年のオジさん。あたし十八だよ？　笑っちゃうよね。それでね、あたし、気を失う前に諦めたの。ぜーんぶ。心情も感情もプライドも体も、ぜーんぶ。好きな小説に出て来る人はさ、こういう時は絶対屈したりしないんだけど。あたしには無理だった」

「それで、体が揺れて、目が覚めたら君がいたの。あぁ、あたし売られたんだ。なんて思っちゃった。ごめんね」

「この人はいつあたしを抱くんだろう、なんて思ってた。記憶喪失なんて絶対嘘だから、どうせ抱かれるなら今のうちに反抗してやるって。でもさ、君はバカだった。大した反撃もせずに、小娘なあたしにボコボコに殴られてた。顔パンパンに腫れて、ろくに喋れてないの。あたしなんか、何でもいいから突っ掛かって、君を傷つけてやるって思ってたのに」

「それでね、最初は力がないんだって思った。もしかしたら、あたしは自由になれるんじゃないかって期待した。少しやり過ぎたかなとは思ったし、人手は欲しいし、あの物作りの能力は便利。だから優しくしたんだ。うん、あの膝枕は打算に溢れた行動なんだよ」

「でも、君は凄いね。どんな魔法使ったのか知らないけど、ちっちゃな砂粒分解して、馬鹿みたいなマナつくるんだもん。それを操作して、光で川を割るんだよ？　この人はあたしなんか、やろうと思えば骨一つ残さず消せるんだって思ったら、凄く怖かった」

「川からここまでの道のりで、ふと疑問に思ったの。ところで、なんであたし生きてるんだろうって。人一人くらい簡単に消し飛ばせる人間を、あんなに殴って、殴って、殴って。なんであたしは生きてて、抱かれないんだろうって。なんでこの人はあたしに優しくするんだろうって」

「そうしたら、急に今までの私が凄く醜く見えた。君、サラダの夕食で塩欲しいなって呟いたでしょ？　聞こえてたの。確かに苦かったし、塩あればマシになりそうだなってあたしも思った」

「そしたら、お母さんのプルムパイ思い出したの。すっごく塩辛いプルムパイ。あの時、お母さんに塩辛いから美味しくないとか、お父さんは死んだんだよって言えば変わったかなって。寂しさに負け

て、変な人に体許さなかったかなって」

「あたしさ。結局お母さんに棄てられたけど、先に棄てたのはあたしだったかもって思った。先に見てられなくて、お母さんの心が壊れて行くのに止めなかったあたしが先にお母さんを見捨てたのかなって、考えちゃった」

ぎゅっと、背中のぬくもりが増した。シエルも僕も森も沈黙を守ってて、それから思い出したかのようにチリチリチリと虫の声が響き渡った。

「……ねぇ。君、名前は？」

寝た振りはいいのかな？

「ごめん。寝てる人は答えれないね」

「う～ん……ねぇ。本当に記憶喪失？」

僕はうなずく。

「そっか」

シエルは一度間を置いて、

「そっか」

と小さく呟いた。

「ねぇ。あたしが名前つけていい？　ダメって言ってもつけてやる」

「シルバ。うん、あんたのことシルバって呼ぶ。あたしの住んでた町、シルビアって言うんだけどね。シルビアは、神の住む所って意味なの。神って言うのは、最高神シヴァの事で、破壊と再生の神様なの。シルバ。本当はシヴァがいいけど、人前でシヴァなんて呼んだら教会の人に捕まっちゃうから。だからシルバ。ねぇ――――――。なんてね」

「ありがとう！　聞いてくれて、少しすっきりしたよ。もう起きてもいいからね」

いやいや、この空気でどう起きろと。無茶振りにも程がありますよ。

あと、名前ありがとう。

シリアス・シリアル（後書き）

やっと名前決まりました。いつまでも『あんた』は可哀相かなと↑

次回更新は二十六日以降の予定です。

売れない布地と熟れない気持ち

朝起きて、昨日調理しなかったキノコをゆでて食べ、僕らは荷物を纏めて森を抜けることにした。鬱蒼と生い茂る草木を僕が掻き分けて、その後ろをシエルが続いていく。あんまり会話をせず、ただ黙々と進んでいると、やがて前方が明るくなり、森を抜けた先に小さな田舎町があった。家はレンガ造りで、小さいながらも活気に溢れた町だ。

「シエル、町だよ」
「言われなくても見えてるわよ。えーと、なんていう町だろう……見たことないわね。レンガ造りってことは相当田舎なんでしょうね」
「ふーん」
レンガ造りは田舎なんだ。
「まぁいいわ。早く行きましょう。足がもう疲れたわ」
「え、大丈夫なの!?」
「少し歩いてむくんだだけだから別に」
「そうじゃなくって、戦争中だよ？　よそ者が入っても大丈夫なの!?」
「……ええ大丈夫よ仮につかまってもあたしは事情話して釈放されて捕まるのはあんただけなんだから!!」
「え、なに怒ってるの？」
「うるさい！　一人で捕まってろ!!」
ぷんすかと効果音が出そうなくらいお怒りのシエルは、僕をおいて町のほうへ歩き出してしまった。
僕、何かしただろうか？

なんとなく謝ったほうがよさそうだったので謝り、散々に説教を食らった。デリカシーが足りないだとか、上げて落とすのは卑怯だ

とか、もう少しいたわりの心を持つべきだなどなど……
町に入るのはなんともなくて、僕たちは家族じゃあまりに似てないので夫婦として町に入ることになった。

「いい、勘違いしないでよ。あたしとシルバが夫婦って事にするのは、周りに怪しまれないようにする為よ。若い男女の二人旅なんて目立つから、仕方なく夫婦を名乗ってあげてるだけで、別に恋愛感情がある訳じゃなくて、これはいわば処世術の一であり――――」

そして今。隣りでずーっと、ずーっと喋るシエルに辟易しながら、僕は今露店をしている。売り出しているものはただの布切れと、布を簡単に加工して作った袋で、シエル曰く通常の三分の二の値段で売り出しているらしい。が、一向に売れない。
なぜだろう。

「ちょっと聞いてる？　大体あんたはあたしを何だと思ってるのよ。あんたなんかあたしがいなきゃ何にも分からないただの坊やなんだから、少しはあたしを敬うなりしなきゃいけないのに、分からないからって値段とか売り方をぜーんぶ人任せにして、あんた何様のつもりなのよ。貨幣のシステムなんか決して難しくないんだからこれくらい根性出して覚えて、少しはあたしを楽にさせてやろうとか考えないの？　ってあ、いや、楽にさせてやろうって、別にあんたに養って貰いたいとか、食べさせて貰いたいとか、例えば仕事終わったシルバを労いながら、ご飯できてるけど先に食べる？　それともお風呂が先？　それとも、その、あ、あた……って、あたしは何を言ってるんだ！　違う違うそうじゃなくて、とにかくあたしは結婚とか意識してる訳じゃなくて、大体あんたみたいな定職にもついてなけりゃお金もない奴と結婚しても、あたしが苦労するのは分かっ

てて、あ、別に好きな人と結ばれる為に苦労するのは別にいいのよ！　そこは勘違いしないでね！　ただ、あたしはせめて明日くらいは生きれる事が分かる程度にはお金がないと少し苦しいかなって思ってて、いや、あんたが悪い訳じゃないわよ、ただ、もう少し頑張ってお金稼いで欲しくて、それならあたしも安心できて、いやいや、別にあんたが心配なだけで、結婚考えてる訳じゃなくて――――」

あぁ、シエルが延々と喋り続けてて皆引いてくのか。ところでシエル。さっきから同じような話ばかりだよ。突っ込んだらうるさくなるのは体験済みだから言わないけど。

そうしてシエルのお説教を右から左へと受け流していると、小さな女の子が僕の前にやってきた。

「あ……あの、これ」

「ん？　この布が欲しいの？」

「――だいたいあんたはちょっと人が心許したら調子乗って、そこに漬け込んで優しくして人の心を惑わそうとしてて――」

「い、いぇ……その、出来ればもう少し短いのが……」

「うん、いいよ。お使いかい？」

「――それにあたしが折角あんたにシルバって名前あげたのに、あんたが話しかけてこないからなかなか使う場面が――」

「あ、はい。お母さんに、変なお姉ちゃんと優しそうなお兄ちゃんの店が安いから、買ってきてくれないかって……」

「あはは。人来ない理由はやっぱりシエルか」

安い店って噂にはなってるみたいだけど。
「――さっきだってガードに二人の関係聞かれたときに夫婦っていうの恥ずかしかったのに、あんたは全然気にしてなくて――」
「あ、あの、お兄さん！」
「なぁに？」
「――今朝だって森であんたが先に行って掻き分けてくれて少しドキっとしてたのに、その後の……ってシルバ聞いてるの！」
「す、好きです！」
「え？」
「……この変態ペドフィリアー！！」
ずごん、という音と一緒に僕の意識はなくなりました。　ねぇ、僕何か悪い事した？

¢

「へぇ、一目ぼれねぇ。ふぅーん」
「は、はい」
「シエル、睨み付けないで……」
この女の子――アンが言った事をまとめると、つまりそういう事らしい。
僕の目に惚れたと。どこの恋愛小説でしょう。与謝野晶子もびっくりだよ。
「ふんっ……まったくこんな奴のどこがいいんだか」

「うわ、傷つくなぁ」
「あの……ご迷惑だったでしょうか？」
「い、いや、別に迷惑ってわけじゃ」
「考え直したほうがいいわよ、この変態は人が寝てる間に勝手に裸を見るような奴だから」
「ちょ、確かに確認は取ってなかったけど、確認なんか取れる状況じゃなかったし、大体その言い方は誤解をうむよ！？」
「わ、私は、その、かまいません……」
「構おうよ！　そこは大切だよね！？」
「夜一緒に寝ても、コトが終われば背中向けてグーグー眠るような奴よ？」
「えええぇぇ！？　絶対わざとだよね、わざと誤解させようとしてるよね！？　シエルは僕を貶めたいの！？」
「あ……うぅ……その、初めてだから、その、あの、優しくして頂ければ……」
「あら、私だって初めてだったのよ？」
「ううぅ……で、でも……」
「うわあぁぁぁ！　誤解だよ、絶対誤解だよ！　かみ合ってるようでかみ合ってないよ！？」
「あんたいい加減うるさい！」
「ぷげらっ」
シエルの右フックが僕の顎にっ！
「あ、あの、大丈夫ですか？」
「だいじょっとっとっと……」
あれ、視界がグラグラする。シエルが緑でアンが赤く見えて……どさ。
「きゃ……シルバさん！？　大丈夫ですか？」
「やば……ジャストミートしちゃった？」
あー……脳震盪になっちゃったのかな？　なんか凄い吐き気が……。

「シルバさん、横になったほうがいいですよ！　わ、私の家近いんで、そこまで運びましょう！？」
「う、仕方ないわね。そうしましょうか」
シエルが僕の足を持って、アンが僕の肩の辺りを持つ。そうして僕はアンの家まで運ばれていくんだけど……。
「うぇ、げぼっ」
「きゃあ、汚い！！」
「ぐぶはっ」
揺れが響いて、胃の中のものを吐き出してしまったら、シエルに手を離されて落とされてしまった。
あぁ、今日は厄日なんだなぁ……。

¢

アンの家は孤児院だった。その家は見るからにぼろぼろで、周りのレンガ造りの家も雨風に晒されてぼろぼろだったけど、ここはもう段違いにぼろぼろだった。孤児院のお母さんは僕を見るなり脳震盪と見破って、タンカを用意してベッドまで運んでくれた。脳震盪のときは動かしちゃ駄目らしい。
「よくうちの男の子が喧嘩して、脳震盪とかおこすのを良く見てましたから」
そういうお母さんは優しげに微笑んで、しょげ込んでいるアンに「次から気をつければいいのよ」と優しく頭をなでていた。
シエルはおきっぱなしにしていた商品を取りに行って、ここには僕とアンとお母さんしかいない。今は昼寝の時間らしく、どうやら他の孤児は別室で眠っているらしい。

「あ、そうだ。アン、布はちゃんと買ったかしら？」
「あ、あぅ……その……」
「話してるときに僕が脳震盪起こしちゃって……シエルが帰ってきたらちゃんと渡しますんで責めないであげてください」
「あら、そうなの？　大丈夫よ、最初から責める気なんてないわ。むしろ病人を放っておいたほうが怒りますとも！」
こんな寂れた状態でも孤児院なんてやってる人だ。やっぱり、気丈で優しいお母さんなのだろう。
僕は記憶にあったはずの母のぬくもりを思い出せない自分を嘆いた。
「アン、お母さんは洗濯物取り込んでくるから、お兄さんの看病してあげてね」
そういってアンにウインクをすると、お母さんはそそくさと部屋を出て行った。
「そうそう、今日はうちに泊まっていきなさい。この町に宿屋なんて洒落たものはないからね。夜にちょっと風で窓ががたがた言うけど、別に隙間風で寒いなんてことはここはないから安心しなよ？」
なんて言葉を残して。
「優しいお母さんだね」
「怒ったら、凄く怖いですよ？　鬼の再来です。頭から角が出てます」
「そんなに怖いの？」
「はい。でも滅多に怒らないです。普段はあんな感じで凄く優しい、自慢のお母さんですよ」
「お母さんは好きなの？」
「大好きです！　……あ、もちろんその、シルバさんも、だ、だぁ……あぅぅ」
顔を赤らめて悶えるアンは、なかなか可愛らしかった。
その後お母さんについて色々と話をして、孤児院の話まで行った時、

「そういえば、この間ガードの人とお母さんが話をしていました」
「ガードって、警備とかしてる人？」
「え？　えぇそうですよ。町の見回りとか、役場を守ったりとかしてる人です」
「そんな人がここに来たの？」
「はい。そのときのお母さん、なんだかつらそうな顔をしてました」
「へぇー」
「なんとなくですが、多分お金の話をしてたんだと思います。見ての通り、この孤児院にはお金がありませんから……税金とかが納めれなかったんだと思います」
　良くある話だなぁ。そんなことを思いながら話をしていると、
「ただいま。……か弱い乙女に荷物取りに行かせといて、なに雑談楽しんでるのよ変態」
「ごめん。でも僕動けないから……ところでずいぶん遅かったね。どうしたの？」
「商品盗られたわ。子供相手だからと思って油断したら路地裏で撒かれて、迷子になってあっちこっち歩いてようやく戻ってこれたのよ」
　そういうシエルは本当にげっそりしていた。
「シルバ、あたしも寝かせなさい」
「え、でもこの部屋布団が……」
「あんたが詰めればいいのよ……あたしは疲れたわ。あんなに走り回ったのに一枚も取り戻せなかったし。少し寝かせて」
　シエルはぐったりとしながらも無理やり僕の隣に潜り込むと、数秒後にはすやすやと寝息を立て始めた。
「羨ましいです」
　それを見たアンは悲しげな顔で、お母さんに話してきますと退室していった。

売れない布地と熟れない気持ち（後書き）

受験終わりました。本当は先月に一度投稿するつもりだったんですが、なかなか話がうまくまとまらなくて、そうこうしているうちに次の受験が……という具合で、本当にすみません。

昨日も昨日で、話を投稿するつもりだったんですがやっぱりうまくまとまらず……途中でこれは駄目だと別の話を書いた次第です。

この話……昨日の夜から今の今までの突貫工事で作り上げたんでちょっと不安かも……

とにかく、大変長らくお持たせしてすいませんでした！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6917j/

光に呑まれて闇に墜ちた

2010年10月31日01時17分発行